

Campus Linguistic Landscapes through the Lends of the Japanese Language Education Framework

TAKAGI Naoko

Abstract

This study aimed to clarify the linguistic landscape encountered on campus by short- and mid-term international students learning Japanese. Specifically, the classification of Japanese represented in the linguistic landscape and its relation to students' activities were examined using the scales and descriptors presented in the *Reference Framework for Japanese Language Education*, categorized according to Maslow's five needs (*physiological needs, safety needs, love and belonging needs, esteem needs, and self-actualization needs*). The data analyzed in this study were the same as those used in Takagi (2025). Since mother tongue interference is likely to occur for students, whose native languages share kanji and Sino-Japanese vocabulary, the participants were primarily drawn from non-kanji-background countries, where such interference is minimal.

Takagi (2025) investigated whether the linguistic landscape could serve as *realia* for international students in JSL (Japanese as a Second Language) environments. This revealed that in order for international students, as learners of Japanese, to autonomously perceive the linguistic landscape as *realia*, a certain level of Japanese proficiency is required. However, it also demonstrated that learners' interest in or engagement with not only the linguistic forms but also the organic meanings of language within contexts and environments varies considerably. Furthermore, it was shown that even students at the C1 level sometimes failed to recognize Japanese embedded in the linguistic landscape.

Considering these findings, the present study re-examined participants' Japanese proficiency levels using the scales of the *Reference Framework for Japanese Language Education*, with the aim of visualizing the relationship between proficiency, interests, and behaviors on campus.

Photographs taken by the participants were then classified according to Maslow's five needs. The results indicated that, across all proficiency levels, the most frequently photographed items were related to the first stage, physiological needs, the third stage, love and belonging needs, and the fifth stage, self-actualization needs, whereas those associated with the fourth stage, esteem needs, were relatively infrequent. Furthermore, items corresponding to the second stage, safety needs, were particularly underrepresented among learners at the S1 level, which corresponds to the introductory stage of Japanese proficiency. The proportion of language and symbols associated with this category exhibited a moderate correlation with the learners' Japanese proficiency levels.

日本語教育の参照枠からみた キャンパスの言語景観

高木 南欧子

キーワード：日本語教育の参照枠、キャンパス、言語景観、マズローの5
段階欲求説、ポートフォリオ

1. はじめに

2020年、COVID-19の世界的な流行により、インターネットを利用した遠隔教育が普及した。遠隔教育の実施にあたっては、遠隔教育の学習経験と対面における学習経験は同一の価値を持つものであるべきである、というSimonson(1999)の同価値理論が参照され、日本国内においても、鈴木(2022)などによって、インターネットを介した学習環境のデザインに関する研究が盛んに行われるようになり、遠隔教育を利用した学習は身近なものとなった。

しかしながら、COVID-19が収束すると、来日する留学生数は以前の勢いを取り戻すかのように急増し、日本学生支援機構によれば、2024年の外国人留学生数は33万6708人となり、過去最高を記録した。物理的な移動を伴う留学は、経済的、時間的な負担が大きい。それにもかかわらず、情報通信技術と教育方法の整備が進んだ現在において、なお物理的に国境を超える留学が求められているとすれば、両者における違いは何か。

大きな相違点として考えられるのは、JSL (Japanese as a Second Lan-

guage 第二言語としての日本語) 環境下か否かという点だろう。日本語学習の点からみると、目標言語によって構築されている社会で生活をする留学は、教室外の接触までも含めた日本語学習の体験を可能にする。そこには、日本語話者との接触や、建物や看板などの環境に埋め込まれた言語景観との接触も含まれる。言語景観とは、看板や掲示物、ポスターや標識などに書かれている文字や記号を指すが、本稿ではデジタルサイネージにおける動的な表示や、エレベーター内の自動音声、チャイムなどの恣意的な音も言語景観に含めることとする。

JSL 環境下においては、学習者は、目標言語の言語景観と接触し、一つ一つを経験として積み重ねていくことが可能である。しかし、接触したすべてが経験的知識につながるわけではない。日本語学習者は、どのような活動の際に、どのような言語景観に接触しているのだろうか。本稿では、留学生を主体的に活動する社会的な存在として捉え、日本語学習と言語景観の特徴の関連を行動の点からみることを目的とする。そのため、キャンパスにおいて、留学生が接触した言語景観を収集し、行動との関連から分析を行う。

2. 日本語教育の参照枠とデータの分類

分析に入る前に、「日本語教育の参照枠」に触れておく。2021年、文部科学省により「日本語教育の参照枠」が示された。これは、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages : Learning, Teaching, Assessment : 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)¹⁾を参考にまとめられたもので、「言語・文化の相互理解・相互尊重を前提として、学習段階に応じた教育内容などを示し、個々の日本語学習者に応じた日本語教育を継続的に受けられるようにするため

の、日本語教育に関わる全ての人が参照できる、日本語学習、教授、評価のための枠組み」（『日本語教育の参照枠』の活用のための手引」p.2）であり、言語教育観の3つの柱（1. 日本語学習者を社会的存在として捉える、2. 言語を使って「できること」に注目する、3. 多様な日本語使用を尊重する）に基づき、6つのレベル尺度が示されている。

本稿では、この「日本語教育の参照枠」の考え方から、留学生を社会的な存在と捉え、分析に用いる日本語の尺度は、「日本語教育の参照枠」にある表1の活動別の熟達度（読む）を参照することとする。「日本語教育の参照枠」には、この他、言語運用能力記述文があり、備えている知識を用いて何ができるか（Can do）を示すものである。本稿では、言語景観の分析から、何を見ることができたか、を見ることにより、何ができるか、できたか、しようとしたかの考察につなげ、自己実現のために日本語を用いる活動の可視化を試みる。

なお、日本語を用いて「読む」活動を行うには、少なくとも、ひらがな・カタカナ・漢字の三つの文字に関する知識、使い分ける能力、及び句読点の使い方に関する能力が必要である。この読む能力（能力 Can do の1つ）には正書法の能力と読字能力がある。正書法の能力は、「文字テキストの受容及び創造の際に必要であり、文字テキストを構成する記号に関する知識と、それを使う技能」とされ、表1をさらに詳しくした言語能力記述があるが、読字能力に関しては、「言語使用者があらかじめ準備されたテキストを音読したり、文字で最初に目にした単語を発話の中で使わなければならない場合には、文字で書かれたものを正しく発音できなければならない」との説明はあるが、言語能力記述文の記載はなく、基礎漢字の目安の提示はあるものの、レベル・分野別の漢字学習については、現在、さまざまな現場で研究がなされている段階であり、各機関での言語記述の作成が急がれている。

表1 言語活動別の熟達度（読む）

段階	レベル	読むこと
熟達した 言語使用者	C2	抽象的で、構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門の記事、文学作品のテキストなど、事実上あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。
	C1	長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを、文体の違いを認識しながら理解できる。 自分の関連外の分野での専門の記事も長い技術的説明書も理解できる。
自立した 言語使用者	B2	筆者の姿勢や視点が出ている現代の問題についての記事や報告が読める。 現代文学の散文は読める。
	B1	非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。 起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。
基礎段階の 言語使用者	A2	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。 広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測が付く情報を取り出せる。 簡単で短い個人的な手紙は理解できる。
	A1	例えば、掲示やポスター、カタログの中のよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。

「日本語教育の参照枠 報告」p. 23

3. 分類のカテゴリーと対象データ

本稿では、言語景観から留学生の行動を可視化する試みとして、分類カテゴリーに A. H. マズロー (1954)²⁾ の5段階欲求説として知られる5つのカテゴリーを用いる。マズローの5段階欲求説は、人間の生得的な行動の動機を5つの階層から成るとした。最初に来るのは生理的欲求であり、

次に安全の欲求、帰属と愛の欲求、自尊の欲求、そして自己実現の欲求である。この欲求はおおむね段階的に進むものであり、まず生理的な欲求が満たされると、次の段階である安全の欲求に移行するとされている。マズローの5段階欲求説は個人の行動の動機を扱うものであり、本稿で扱う行動とは異なる文脈のものである。しかし、個人を生物的・社会的・自己実現的な存在であるとするマズローの捉え方は、言語の使用者を社会的存在として捉え、できる (Can do) ことを問う CEFR や「日本語教育の参照枠」と通じるものがある。ただし、本稿は、動機や欲求をみることが目的ではないため、マズローの5段階の分類は、行動を分類するために用いることとし、言語景観の特徴や日本語教育の参照枠からみたレベル尺度との関連について考察を行う。

3.1 5段階欲求説の応用

マズローの5段階欲求説においては、調査の対象は成人であることが多く、学習の目的も語学が主ではなかったため、本稿において援用する際には、修正を要する。そこで、本稿では、それぞれのカテゴリーにおいて、表2のように構造的な修正を行うこととした。修正にあたっては、20代前半から後半の若者が、留学先のキャンパスで遭遇する場面を想定して作成した。

3.2 対象データ

分析対象のデータは、高木 (2025) で用いたデータの一部である。高木 (2025) では実験的に留学のポートフォリオを作成し、データとした。5カ月から10カ月の中・短期滞在の交換留学生を対象に、キャンパスで見た景観を撮影、分類してもらい、半構造的アンケートを参照しながら、撮影された言語景観の分類をし、特徴をみた。その結果、言語景観を認識す

表2 マズローの5段階欲求説の構造の応用 キャンパスにおける「行動」の観点から

5つの欲求	H. マズロー (1945)		キャンパスにおける言語景観
自己実現の欲求	良い画家になりたい、あるいは素晴らしい親になりたいなど個々によってさまざま。個人の成長への欲求。	→	目標を達成する、能力を向上させるなど、個人が成果を出すための行動と関連するもの。
自尊の欲求	相互補完的な関係にある自尊心と、他者を尊敬する心。自信や価値、世の中で役に立っているという感情にもつながるが、劣等感で弱さ、無力感にもつながることがある。他者から受ける尊敬。	→	目に見える、あるいは確認できるような形で感じられる自信や尊敬、やりがい、または、自身のなさに関連するもの。
帰属と愛の欲求	愛を与えたり、愛を受け取ったりする欲求。故郷、グループ、ルーツなどに属しているという欲求。	→	友人や恋人とのコミュニケーションや存在を確認する行動。集団や共同体とのコミュニケーションや自己の位置づけを感じる行動と関連するもの。
安全の欲求	安全、安定性への欲求であり、不安、恐れからの解放。革命などの社会的に不安定な状況におかれたり、戦争、自然の大災害等の災害の時になると積極的な意味を持つ。	→	主に身体に関わる安全の確保や、危険・不安からの回避や、地震や津波などの自然災害や、病気等、急変する政治情勢に対する備えと関連するもの。
生理的欲求	人間の欲求の中でまず挙げられる欲求。全てのものを失っても、満たさなければならない最も主要なもの。寝る、食べる等。	→	生命活動の維持のため、絶対的に必要になる行動と関連するもの。食べる、トイレに行く等。

※ H. マズロー (1954) の欲求は、筆者の解釈によるまとめ

るためには、ある程度の日本語能力が必要であるが、日本語能力の高さが言語景観に埋め込まれた日本語・記号の意味理解と完全に一致するわけではないこと、及び、言語形式への興味が必要であることが示唆されている。

今回は、言語景観と日本語学習の関連をみるうえで特徴的であった調査

対象者を抽出し、表2のカテゴリーから写真の分類を筆者が行った。調査対象者の出身は、非漢字圏の国・地域であり、データ収集の実施は2022年から2023年に行った。

4. 分類方法

5つの欲求との関連として、分類を行った例を表3に示す。分類にあたっては、撮影された景観全体を対象とした。分類においては、分類が1つの階層にとどまらず、複数の階層にまたがるものもあった。例えば、「教室」などは、「帰属」とも「自己実現」とも解釈できる。クラスメイトから尊敬されたい、あるいは尊敬するクラスメイトがいるなどの場合は、「自尊」とも考えられよう。そこで今回は、クラスメイトや教員に対するコメントが半構造的アンケートで見られた場合、「帰属」に分類し、共同体が想定されないような場合は、「帰属」「自尊」ではなく、「自己実現」に分類を行った。また他に、「エレベーターの乗り場」は、判断に迷う部分があった。調査を行ったキャンパスのエレベーターの一部は、時間帯によって停止しない階があるからである。そのため、「安全」の分類の可能性もあるが、特定の階に焦点をあてて撮影されている場合、学内者のみが施設の利用方法を知っており、それが共同体の一員であることを意味すると解釈できたため、「安全」の上に位置する「帰属」になるという解釈を行った。この他にも判断に迷うものもあったが、上の階層にある欲求は、下の階層の欲求がおおむね満たされているということが前提にある、というマズローの説明に近い状況であることが推察されたため、大概是上の階層の欲求と関連するものとして解釈した。

表3 関連する行動による撮影された景観の分類（非言語含む）

5つの欲求との関連	キャンパスにおける言語景観	具体例（言語・非言語の両方）
自己実現の欲求	目標を達成する、能力を向上させるなど、個人が成果を出すための行動と関連するもの。	教室、教室に入口にあるカードリーダー（出席管理）、図書館、図書館にあるOPAC（蔵書検索）、図書の貸り出し・返却システム、専門に関わる図書・図書ブース、パソコン
自尊の欲求	目に見える、あるいは確認できるような形で感じられる自信や尊敬、やりがい、または、自信のなさに関連するもの。	指導教員の研究室、プレゼンテーションスペース、日本語サポートなど自主的、少人数での勉強をするスペース、教職過程の指導室、ティーチングアシスタントをしていた教室
帰属と愛の欲求	友人や恋人とのコミュニケーションや存在を確認する行動。集団や共同体とのコミュニケーションや自己の位置づけを感じる行動と関連するもの。	テラス、ラウンジ、友人や恋人が写り込んだ風景、自撮り写真、グループで勉強できるスペース、ソファ、国際課などのよく利用する部署、キャンパスの全景、建物に施されている大学のロゴ、窓から見える風景、エレベーターの乗り場
安全の欲求	主に身体に関わる安全の確保や、危険・不安からの回避や、地震や津波などの自然災害や、病気等、急変する政治情勢に対する備えと関連するもの。	学内マップ、AED、マスク着用・黙食を促す表示、手などの消毒液、関係者以外立ち入り禁止の標識、入構にあたっての注意書き、エレベーターやエスカレーターの案内音声・記号、非常口のサイン、ゴミ箱（捨て方）の表示、食堂・カフェテリアの行列整理のための記号、返却トレイの分類の表示
生理的欲求	生命活動の維持のため、絶対的に必要になる行動と関連するもの。食べる、トイレに行く等。	食堂・カフェテリア、券売機、大学生協、メニューが書かれた看板、トイレの記号、ユニバーサルトイレの記号、シャワートイレなど機能を示す記号

5. 分類結果

表3によって、撮影された写真の分類を行ったものを表4に示す。()内の数字は、撮影された写真のうち、言語・サイン・音声・デジタルサイネージが含まれている枚数を示している。調査対象者が「S1」、「S2」から3、4が飛んで「S5」になっているが、これは高木(2025)と比較できるように、調査対象者のIDをそのまま使用しているためである。

次に、表3を、調査対象者ごとにグラフで示したものを図1に示す。枚数の総数は各調査対象者のグラフの右端に数字で示した。また、各調査対象者が撮影した総枚数を100とした場合、それぞれに含まれる欲求との関連による区分と、そこに含まれる言語・サイン(音声動画含む)の枚数の割合を黒塗りで下の段に示した。グラフでは凡例を数字で示しているが、01は生理的、02は安全、03は帰属と愛、04は自尊、05は自己実現の分類を表している。

図1をみると、生理的欲求、帰属と愛の欲求、自己実現の欲求は、言語を含んでいるか否かを問わず、すべての調査対象者において一定の割合を占めていることが分かる。一方、自尊の欲求はどの調査対象者においても少ないこと、安全の欲求は、特にS1において非常に少なく、言語・記号が含まれたものがまったくないことが分かる。安全の欲求について、他のS2、S5、S9をみると、S5、S9に占める割合は若干であるが多くなっており、その中に占める言語・記号が含まれる写真の枚数も多くなっていることが分かる。

表3において分類した具体例を見返すと、安全に関わるものは、AEDやマスク着用など、一目見れば直感的に分かるものと、写真1のような注意書きや学内マップなど、読まないと理解できないものに大きく分かれて

表 4 撮影された写真に占める欲求との関連と言語形式との関連

調査対象者	読むレベル	撮影枚数/欲求との	生理	安全	帰属と愛	自尊	自己実現
S9	B2~C1	122 (86)	18 (14)	34 (32)	54 (28)	4 (3)	12 (9)
S5	A2	64 (45)	11 (9)	17 (17)	3 (13)	3 (2)	7 (4)
S2	A1	122 (58)	28 (15)	28 (25)	43 (3)	4 (2)	21 (13)
S1	A0~A1	33 (10)	6 (2)	1 (1)	15 (0)	2 (1)	9 (6)

※レベル判定は筆者による。

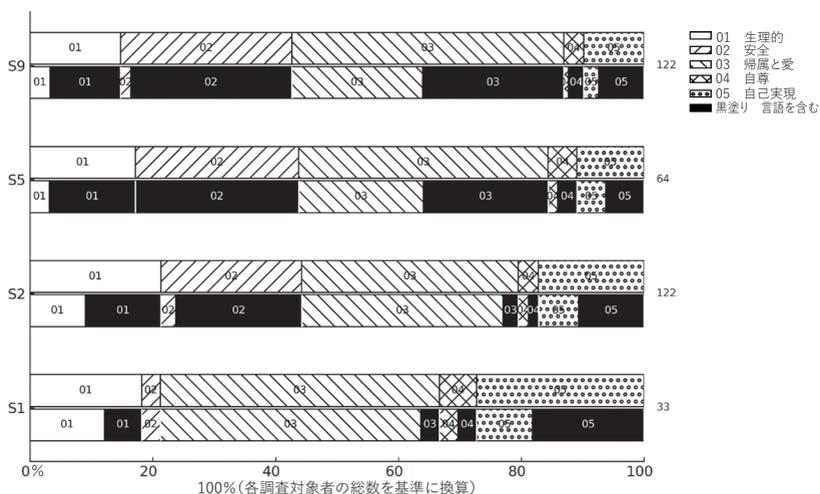


図 1 撮影された写真に占める割合と分類

いる。調査対象のキャンパスは、建造物の細部を定めたランドデザインによって施工されており、サイン計画が含まれている。サイン計画の詳細をここで示すことはできないが、サイン計画では、視認性を高めること、英語表記の併記をすることが示され、それらは生理的欲求や安全の欲求に関わるような設備に反映されている。しかし、表示の日本語を観察すると、



写真1 食堂の入口「手指の消毒 ご協力をお願いします」

用いられている漢字の難度や、併記されている英語表記の小ささなどにより、「読む」日本語のレベル尺度がA0～A01であったS1の調査対象者には文字ではなく図やデザインとして認識されてしまい、目に留まらなかった可能性が考えられる。

安全に関連するものとして分類された日本語を、表1の言語別習熟度を参照し、どのレベルに該当するかみてみると、A1からA2に該当する項目であると考えられる。A1レベルに該当するS2の調査対象者は、黒塗りの部分に示される割合からみると、S1に比べ、安全に関する言語景観が読み取れていたと考えられる。S2のアンケートから関連する項目を探したところ、分からない日本語は友人に聞いたり、スマートフォンの画像翻訳アプリを利用していたという回答があった。「『日本語教育の参照枠』の手引き」においては生活漢字の目安が提示されているが、主体的な活動を行うためには、このような基礎的な知識を備えていることが、活動を行



写真2 放課後に利用していた日本語学習サポートルーム

うためのレディネスとして必要であることを示している。教室外での学習を促すためには、まず、学習者がA1レベルの言語知識をレディネスとして備えていることが重要な要素であると考えられる。

安全の欲求の他に、今回の調査で少なかったものは自尊に関するものであったが、量として見た場合、自尊の上の階層に位置する自己実現に関わる写真より少ないという結果であった。また、自尊に分類された具体例をみると、プレゼンテーションスペースや、自主的な放課後の勉強、指導教員の先生の研究室などの写真であり、すべての調査対象者において、場所が限定されていることが分かった。自尊に関わる活動について、アンケートに関連した記載がないか探してみたところ、特定の人との関わりについては、キャンパス外の寮やアルバイト先などのプライベートな時間での活動が多く、今回の調査方法では収集できない場所が多いことが分かった。

キャンパスにおいて、自尊に関わる活動を日本語だけで行うと考えた場

合、表1でみた「言語活動別の熟達度（読む）」の尺度で捉えたとすると、キャンパスにおける自尊に関連する活動は自立した言語使用者のレベルのB1以上のタスクになる。しかし、読むことに関連するのは、レポートに関するものやメール、メッセージアプリによる活動など、個人的な情報を多く含むものが多いと思われ、キャンパスにおける言語景観として可視化するには課題があることがうかがえた。

6. まとめ

本稿では、高木（2025）でみたデータの一部を、マズローの5段階欲求説を援用し、日本語教育の参照枠から見たキャンパスにおける留学生の行動の難易度と行動の具体例をみた。基礎的段階の言語使用者には日本語を使用しての自立した行動が難しいことが多いことが分かったが、S2のように友人に聞いたり、翻訳アプリを活用するなどして、解決する方法があることも再確認された。S1の調査対象者は、学生生活のほとんどを英語で過ごしていたが、生理的欲求のうち、特に食に関する学習意欲は旺盛であり、アンケートからも大学生生活を楽しんでいたことを添えておく。

留学生自身が撮影し、分類を行ったデータは、内省が可視化できるポートフォリオであると言える。今後は、データの分析を増やすとともに、本稿の結果を内省につなげる試みをすすめていきたいと考える。

注

- 1) CEFRを日本語教育の視点から説明しているものに奥村ほか（2016）がある。
- 2) A. H. マズローの研究の詳細については、三島（2024）がある。また、日本語教育との関連では、山田（2020）に考察がある。

参考文献

- 奥村三葉子・櫻井直子・鈴木裕子編 (2016) 『日本語教師のための CEFR』 くろしお出版
- 小口忠彦監訳『人間性の心理学』(産業能率短期大学出版部、1971)
- 鈴木克明 (2022) 「with コロナ時代における日本語授業の設計—インストラクショナルデザインの手法を生かして—」『小出記念日本語研究会論文集』30号、pp. 77-84
- 高木南欧子 (2015) 「留学生の日本語を支えるレアリアをめぐる」堤正典編『ロシア語学と言語教育 V』神奈川大学言語研究センター、2015、pp. 25-44。
- 高木南欧子 (2025) 「キャンパスにおける言語景観との接触—言語景観はレアリアとなり得るか—」『多文化共生社会における情報発信を再考する』神奈川大学人文研究所「言語景観と多文化共生」共同研究グループ編 くろしお出版 pp. 149-177
- 高木南欧子・佐藤梓 (2025) 「キャンパスの自治と観光の共存—言語景観に映るアフォーダンスとシグニファイア—」『多文化共生社会における情報発信を再考する』神奈川大学人文研究所「言語景観と多文化共生」共同研究グループ編 くろしお出版 pp. 178-184
- 三島斉紀 (2024) 『マズロー論者への挑戦 その批判的考察』神奈川大学経済貿易研究叢書 第36号、文真堂
- 山田泉 (2020) 「多言語・多文化背景の年少者のキャリア形成」『日本語教育』175号 pp. 4-18
- Maslow, A. H., *Motivation and Personality*, Harper & Brothers Publishers, Inc., 1954. (小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率短期大学出版部、1971)
- Simonson, M. (2000). Equivalency theory and distance education. *Tech Trends*, 43 (5), 5-8.

参照 URL

- 文化審議会国語分科会 (2021) 「日本語教育の参照枠 報告 令和3年10月12日」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf 2025年9月10日閲覧
- 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 (2022) 「『日本語教育の参照枠』の活用のための手引き 令和4年1月28日」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93696301_01.pdf 2025年9月10日閲覧
- 日本学生支援機構 (2025) 「外国人留学生在籍状況調査」 「2024 (令和6) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」 https://www.jasso.go.jp/statistics/ryugaku_zaiseki.html 2025年9月10日閲覧